インフィニット・ストラトス・マガツ

トバルカイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス・マガツ

【Ｎコード】
Ｎ０２５４ＢＡ

【作者名】
トバルカイン

【あらすじ】
これは、ひとりの「詐欺師」との出会いで始まってしまった物語。
織斑一夏と言うＩＳを扱える一人の人間の物語。
正道を望む者には不要である。

（前書き）

とりあえず、織斑一夏にあんな事やこんな事が降りかかってほしい言う願望と渇望
で書きました。色々間違っていたらすみません。

まず、意識はある。手足は動く感覚はある。
俺、織斑一夏は現在とても普通じゃない場所に居た。
俺は白くて柱もない椅子に座っていた。
目の前には白いテーブル形は丸くてチェスの台が置けるような範囲だった。
周りは暗く、何故か自分の座っている場所とテーブルだけがしっかりと明るかった。
そして俺は考えるなんでここに、居るのかを結論はこうだ。
俺は、（夢）を見ているんだ。
だから俺は柱もない白い床から浮いている椅子に、座っているんだと。
だってありえないだろう、これ、どう考えたってこれは間違えなく夢だ。
記憶はある、今日のＩＳの授業が終わって、箒やシャルやラウラやセシリアに鈴で簪でみんなに会っているし、飯も食ったし、千冬姉と廊下で会っておやすみとか話もした。
そして、その後は部屋に着いて、風呂入って、歯を磨いて、いつの間にか楯無さんが。
『こんばんは、あなた。今夜はお風呂にする？。おやつにする？。それとも、わ・た・し・？』
などと言って、背後から抱きつかれた。
とりあえず、冷静になって離してもらって彼女とも色々話しをして寝る時間には帰っていった。
そして、明かりを消して眠りに着いた。
うん、覚えている。だからどう考えたってこれは『夢』だ。
でも、なぜだろう、この夢やけに『リアル』すぎる。『息』をして

いるのが『リアル』にわかる。
すべての五感が『リアル』に感じている。椅子に座っている感触も伝わってくる。
座り心地がちょっといい。だから、違和感を覚える。

「ここは、どこだ？・・・・」

周りを見渡しながら、俺は椅子から立ち上がろうとした。すると・・・・。

”やぁ、初めまして。織斑一夏君”

「っ！？」

その『男』はいつの間にか、テーブルの前にいた。彼も同じように座っていて俺に微笑んでいた。
だが、なぜだろう？。この男は何かがちがう。例えるなら『影』。
そう影法師のような男だ。
髪は黒い長髪でとても長い。服装はボロイマントを羽織っていた。
その顔はやや女っぽい。

”私を見て、やや女っぽい。っと感じているかな？”

・・・顔に出ていたかな。俺ってよほどわかりやすいのかな？。千冬姉に曰く。

「・・・・・・」

なぜだろう？。この男から、目が離せない。なぜかわからないけど

この人は風陰気が違う。
弾やほかの男とは違う何がその男にはあった。何故か、考えられない。
この人は『なんだ』？。
”私が、なんなのかうまく考えられないかな？織斑君”
「――――ッ！！？」
そういえば、この男どうして俺の名前を――――――。
”私は知っている。この世界も、君の事も、すべて知っている”
”改めて自己紹介をしよう。私の名前は『カール・エルンスト・クラフト』いったてどこにでもいる”
”ただの詐欺師だ。まず、君がどんな状態なのかを説明しよう。君は今、潜在意識の中に居る。なぜ？”
”それは私が君の頭の中に干渉しているからだ。君達の漫画と言う娯楽に例えるなら超能力を使っているのと同じだ。理解できたかな？。織斑君。”
「・・・超能力？って、そんな事」
ありえるのか？じゃあ、俺が見て感じているこれはいったいなんだ？
”ありえない事なんて、ありえない。今君が見て感じているのはそれだよ”
若干、芝居が繋ったような言い方だがこの男の言っている事は何故か不思議に本当の事に感じ始めた。

そろそろ、落ち着こう。俺、逃げちゃダメだ。なんか逃げてはいけない気がする。まずは――――――。

「・・・・・アンタは、いったい何者なんだ？」

そう、向き合ってみよう。この人とこの『現実』と言うものと。俺はこの男の目をしっかり見てそのセリフを答えた。すると、男は不敵に少し笑い。口を開いた。

”然り、私はいったてどこにでも居るただの詐欺師。それ以上でも、それ以下でもないよ。”

”私の事は、好きに呼んでもいい。君ならヘンな名前は付けないからね。「よろしく」織斑君。”

「ここは、潜在意識って言ったよな？いったいなぜ俺に？」

”それは、君に興味を持った。君を始めて見たとき、「おもしろい」可能性を感じた。”

”そして私は君を『見て』『確かめて』時期を頃合に感じて、ここに居る。”

すると男の目の前に一冊の本が突如出現した。その本は色が白く、少し部厚い。

その本は宙に浮いていて不思議と開いた。パラパラと中のページが捲っていくたびに俺の周りから

モニターが出現する。その映像に写っていたのは、俺だ。

セシリアと決闘した映像や鈴と無人機ＩＳと戦っていた映像。ほかにも学年別トーナメントでシャルと

一緒にペアを組み、ラウラと戦う映像もあった。銀の福音の戦いも簪と箒と一緒に無人機ＩＳと戦っている映像。そして、他にも色々

と映像があった。そのすべては俺がＩＳ学園で過ごした思い出の映像。

「これは・・・俺の」

”君の『記憶』だ。言っただろう私はすべてを『知っている』この記憶からして君は色々な経験を積んだのだね。とても、頑張っているようだ。織斑君。しかし、はたして君はこのままでいいのかな？君の人生は満ちているかな？君はこのままで世界が廻っていくと思っているのかい？”

男は白い手袋に包まれた手を出して本を閉じた。すると俺の周りの映像もすぐに消えた。

男は、俺を見てそんな事を言ってきた。

「・・・なにが言いたいんだよ」

俺は、彼を少し強気を出して答えた。男は特に気にもせず話した。

”君は、今の人生にどこか、満ちている自分がいる。”

”私から見てみれば、君はそう、とても弱い人間だ。織斑君”

”はたして、今の状態の君が誰かをホントに守れると思っているのかな？”

そのセリフに俺は少しムッとしたが、何故か俺は反論がこの男には通じない気がした。

色々と考えて次のセリフを言おうと思ったが、その前に男が話した。

”女尊男卑。なんともバランスが崩れてしまった世界で、君は何かを感じていないかな？”

”この世界は歪んでいるなんて事も、考えたかな?。それとも「考えないようにしている」。”
”でも、考えてみたまえ。もしも君が試験を受けるあの日、ＩＳにたどり着いていなければの可能性”
”君は、どんな人間になっていたかな。そして、どんな人生を流れるのかを考えたかな?”
”そう、これは人なら誰しも考えるもう一つ人生路の考慮。人は己の道を選んで生きるのだから”

「それって・・・つまりＩＳと出会わなかったらって言う可能性なのか?」

俺は男を見据えて答えた。男は持っていた本を右手に持ち替えて、何もせずそのままテブールの上におき。俺をおもしろそうな人を見る目で見てくる。何故かその目線に不気味さを感じた。

”然り、だが考えてみたまえ君はあの時、なにか『違和感』を覚えなかったかな”
”まるで誰かに、導かれているみたいに感じなかったかな。”

「それは・・・」

”考えられなかった。そして何も感じない。君からしてみればあれは道に迷っただけだと思っていた”
”だが、あれは「人」の手によって示されていたのだよ。でも、君は知らない考えられなかった。”
”自分が誰かの手の平の上で踊らされる人形だと言う事に”

「――――ッ!?どう言う事だよ!」

”そのままの意味だ。織斑君。君も彼女達も世界さえも、『ある天才』の手の平の上だ”

”心当たりはあるだろう。君の世界で知っている、唯一の天才の人間を”

天才・・・・と言えばたしかに知っている。だけど『彼女』がそこまでするのか？

俺の知っている『天才』。それは――――――――「篠ノ之束」あの人の手の平って？

”知らぬならば答えよう。あの無人機の事件も銀の福音の暴走の事件も、すべて『束』の仕業だ”

「――――――っ！！？そんな事は！！」

俺は告げられたセリフに信じ切れず身を乗り出した。すると男は右手で待てと制止て微笑んでいる顔で

一指し指を立てて話し始めた。

”亡国機業（ファントム・タスク）のやった事は別だか、少なくともこの二つ事件は彼女の意図だ”

”君は『白騎士事件』を覚えているかな？日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、２３４１発以上のミサイルが発射されるも、その約半数を白騎士が迎撃した上、それを見た軍の人間は白騎士を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。あのミサイルを発射させたのも、『束』だ”

「・・・・・・・・・っ」

何を言っているんだ？この人は、もう何が何だか考えが・・・・束さんが無人機とかミサイルとか
それ・・・いったい、何を？わからない。あれえない。何だこの人は？俺はそのまま力なく椅子に座り直して、頭を片手で抱えた。

「・・・・ありえ――――」

”そんな事はありえないと言いたいようだが、言ったはずだよ。「ありえない事はありえない」と”
”ならば君に少し見せてしんぜよう。私が語っても信じられないなら。君の頭の中に教えてあげよう”
”もとより、ここは君の潜在意識。頭の中にも精神にも居るわけだが今から直接、君に私の知っている事を見せてあげよう。織斑君”

ふと、足元に俯いていた顔を上げると男の右手が俺に向かって伸びてきた。そのままゆっくりと俺の額に
一指し指を付けた。そして――――

”見せて差し上げよう。一つの真実を”
”そして、考えて、答えを知るのだ”

突然俺の頭の中に何かが、ドロリと入り流れ込んできた。

（後書き）

続きは、この障害をもった頭で、できるだけ考えます。
この先一夏は、変わっていく前提に作ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0254ba/

インフィニット・ストラトス・マガツ

2011年12月31日16時51分発行